

平成 24 年度 校内研修(究)計画書

十和田市立北園小学校

1 学校の教育課題

教育目標	三本木開拓の精神に学び、郷土の発展に寄与する人間の育成
<かしこく>	創造力があり、未知を切り開く子ども
<やさしく>	情操豊かで、意志の強い子ども
<たくましく>	体が健康で、たくましい子ども

本校の児童は、明るく元気で素直な子どもが多い。保護者は協力的で、教育に対する関心が高く、自分から進んで学ぶ態度と力をもつ子どもになって欲しいと願っている。

20 年度から始まった学びたいムや学習における機器活用・放送番組の活用の在り方に関する校内研修等の取組の成果として、学力検査の分析においては、どの学年、どの教科においてもほぼ全ての観点で全国平均を上回っていることから基本的な力は着実に身につけてきていると言える。自分の思いや考えをしっかりと言葉や図・表などで表現する力を育て、互いに高め合えるような練り合いの場を設定し、交流活動を充実したものにすることで、本校児童の学力は、更に確かなものになり、学び続けようとする意欲も高まるものと考えられる。

児童に身につけさせたい「対話する力」を明確にし、指導計画や指導体制などを工夫しながら、よりよい考えに高め合える授業のあり方を模索した校内研修を行いたい。

2 本年度の研究計画

(1) 研究主題

自ら考えたことをもとに、「対話する力」を育てる授業の追究

～身につけさせたい「話し合う力」を明確にした交流活動を通して～

※本校の定義する「対話する力」とは・・・

相手と向かい、自分の思いや考えをやり取りする活動。(※ここでいう相手とは、自分の心、筆者、登場人物等も含める、広い意味での概念。)その「対話する力」の中でも、特に言葉で自分の思いや考えを伝え、自分が話し手になったり、聞き手になったりするなど「言葉のキャッチボール」を繰り返しながら、相手を理解し互いに高めあっていく力を「話し合う力」と捉える。

※身につけさせたい「話し合う力」を明確にし、とは・・・

考えを高め合える交流活動を行う上で各学年において必要な「話し合う力」を明らかにし、学年ごとの「目指す児童像」を設定する。その「目指す児童像」を意識して(児童にも意識させ)日常実践を行い、評価としても活用する。

(2) 主題設定の理由

① 学習指導要領との関連

現行の学習指導要領改訂のポイントの一つは、「表現力」の育成である。国際化・情報化社会において、共生し、主体的に生きるために、互いの立場や考えを尊重しながら「言葉で伝え合う力」を高めることは、きわめて重要である。

この伝え合いが成立するためには、相手や目的、場面等に応じて自分の思いや考えを適切に表現・伝達する力と共に、相手の立場を尊重しつつ言葉を通して考えを的確に理解する能力・態度の育成が不可欠である。個々の考えが確立していることは前提であるが、この個々の考えが確かであれば深いほど「伝え合う」ことによって、内容が深まり、新たな価値を生むことになる。すなわち、「伝え合う力」と「考える力」の高まりによって、それぞれの個を高め合うことになり、お互いが学ぶ喜びを実感し、成就感を味わえる魅力ある学習が成立すると考えられる。これは本校の目指す「対話する力」と目指すところは同じものとする。

② 児童の実態、学校や地域の課題との関連

本校教育目標「かしこく やさしく たくましく」は、子どもたちが変化の激しい社会にあって、主体的に生きていく資質や能力を身につけながら、自立した個を確立し、よりよい自己実現を図ることを目指している。そのためには子どものよさを生かし、一人一人の知的なものの見方考え方を高め、生きる力を育むため、それらを支える基礎基本の徹底、自分ごとの学びの確立、「腑に落ちる」学びを重視している。

本校児童は、与えられた課題に対しては真摯に取り組み、思考力、表現力また応用力に関しても一定水準以上の力を示している。しかし交流場面ではそれらを十分に生かした話し合いとなっていない様子が見受けられる。話し合いにおける児童の実態を分析したところ、話し合いにうまく参加できない児童は意欲的な面とスキルに問題がある児童に二分された。そこで昨年度は、ペア・グループ等の交流場面を多く取り入れ話す機会を増やすとともに、対話する力の基盤となる、身につけさせたい「話す力」「聞く力」を明確にした交流活動について研究を進めてきた。その結果、相手の考えを正確に聞くとともに、自分の考えを適切に表現する力が身につけてきた。そこには、双方向的なやり取りがあり、より高いものを求めようとする姿が見られるようになってきた。論理のやり取りは言葉を介して行われるものであり、交流活動の充実は、論理的思考力を育成することにもつながると考える。

そこで、今年度は話す内容の充実を図ることが次へのステップにつながる課題であると考え、本研究主題を設定した。

③ これまでの研究の成果と課題の関連

23年度の研究では、22年度の反省より、よりよい考えに高め合うための「対話する力」の育成の必要性が指摘された。そこで各学年で身につけるべき「話す力」「聞く力」を明確にし、発問や交流場面における支援の在り方を工夫することで、考えを伝え合える子どもを育成することを目指した。対話力の基準となるチェックシートを作り、学級の児童の実態を明確にした上で、効果的な支援の在り方を模索した。話型指導や話し合いの進め方、話し合いの観点を明確にする等、ベーシックな部分の指導の在り方を見直し、それを土台に具体的な支援の在り方を提案した。その結果、子どもたちは交流場面に話し合いの仕方、伝え方（表現方法）、聞き方を身につけ、少しずつではあるが対話する力が育ってきた。基礎・基本

の積み重ねが対話力を育てるうえで非常に重要であることを再認識させられた。

今後は、基礎・基本を土台としてさらにステップアップするために、子ども達が話し合いをしたくなる魅力ある授業になるよう、教材提示・課題設定・発問の工夫や交流場面における支援の工夫を研究し、児童の「対話する力」の育成に努めていきたいと考える。

(3) 研究目標

より良い考えに高め合う「対話する力」を育てるために、児童が「話したい」「聞きたい」「質問したい」と思えるような授業の展開や活動の場を工夫することが有効であることを、授業実践を通して明らかにしていく。

(4) 研究仮説

「話したい」「聞きたい」「質問したい」と思えるような教材提示・課題設定・発問の工夫や交流場面における支援の工夫をすれば、自分の思いや考えを話し合える子どもが育つであろう。

① 『教材提示・課題設定・発問の工夫』とは・・・

子どもたちが「話したい」「聞きたい」「質問したい」という切実感や必要感、また知的欲求を喚起するような教材提示・課題設定・発問を工夫する。

(例)

- ・不思議な現象を見せるなど、子どもの興味・関心をひきつけるような教材提示。
- ・二律背反(○か×か、AかBか、など)に限定するような課題設定。
- ・「分からないことを聞きたい」「自分が知っていることを教えたい」と思えるような発問。
など

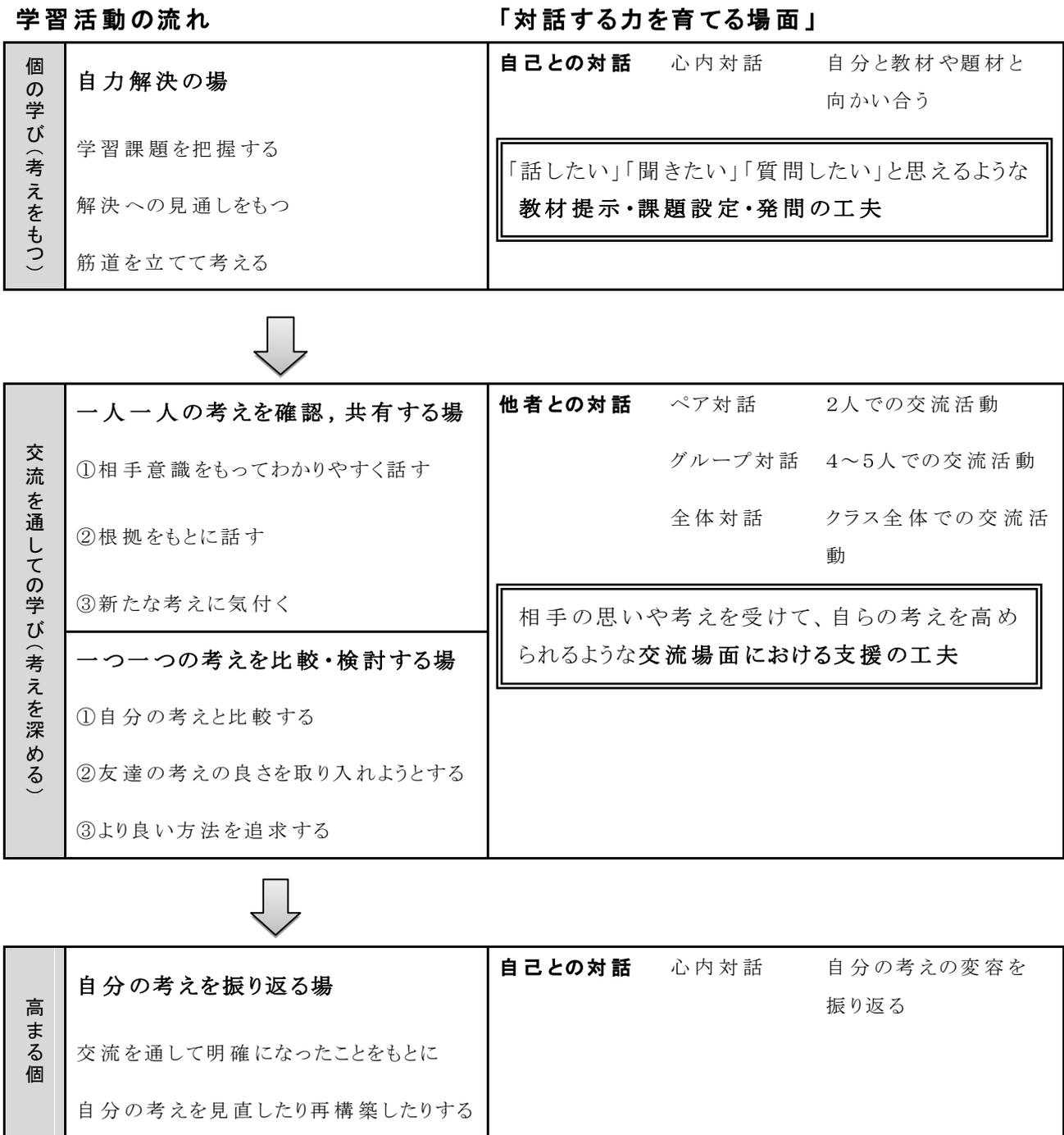
② 『交流場面における支援の在り方を工夫』とは・・・

一方的な伝達ではなく、相手の思いや考えを受けて考えを高めていけるような交流活動になるように支援を工夫する。

(例)

- ・交流形態(ペア交流、グループ交流、全体交流)やメンバーの構成に関する支援。
- ・ICT機器の活用など自分の考えを表現したり説明したりする方法に関する支援。
- ・相手の考えを書き留めたり、自分の考えを整理したりするためのワークシートやノートに関する支援。 など

【授業のモデル図】



(5) 仮説の検証に向けて

- 「事前の実態調査」と「事後の実態調査」を比較・検討し、児童の変容を調べる。
- 検証授業において、活発な話し合いが行われたかどうかを観察し、仮説に関する手だてが適切だったかどうか検討する。
- 抽出児童の普段の様子と検証授業での様子の違いを観察し、仮説に関する手だてが適切だったかどうか検討する。